

間伐材はどのくらい捨てられているのか？

1. 研究のねらい

パルプ材等の需要・価格の低迷により、特に間伐材生産の土場等に残置されている素材(以下「土場残材」という。)の増加が目立っている。チップ化等によるバイオマスエネルギー利用を目的に、これら土場残材の発生量を推計するための調査を行った。

2. 方法

平成11、12年度に間伐・全木集材を行った34ヶ所(スギ、カラマツ各17ヶ所)の県有林について、素材生産量と土場残材量並びに対象林分の平均単木材積を県有林担当者の協力により調査した。

3. 結果

事業地毎の素材生産量に占める土場残材量の割合「土場残材率」と林分の平均単木材積の関係を図-1に示した。スギでは単木材積が小さいほど土場残材率が高い傾向が見られ、カラマツでは土場残材率が30～40%前後に集中する傾向が見られた。



プロセッサで処理した間伐材 (○が土場残材)



土場に残されたスギ間伐材(長さ1.8m)

スギでは、長さ3m未満の素材の需要がないため、特に平均単木材積の小さい林分では短尺材が多く、残材率が高くなると考えられた。

カラマツでは、長さ2.2mのパレット材や2.0m材でもパルプ材以外の土木用杭材等としての需要があることから、残材率が極端に高くなることは少ないと考えられた。

4. 成果と今後の進め方

スギとカラマツの間伐において、全木集材を行った場合の土場残材の発生概況が明らかとなった。土場残材の発生量を林分の平均単木材積等を基に推計するためには、今後さらに樹種別に土場残材率の調査を重ねる必要がある。

